

国際共・共拠点 2020 年度成果報告会が開催されました

東京大学医科学研究所 国際共同利用・共同研究拠点の 2020 年成果報告会が 3 月 9 日 - 11 日にわたり開催されました。今年は新型コロナウイルスの影響により、オンラインで開催され、千葉大学真菌医学研究センターとの合同成果報告、国際共同研究成果報告を含め、3 日間の日程となりました。報告会には、ゲノム・がん・感染症・免疫など様々な専門分野にわたる国内外の研究者が延べ 145 人参加し、2020 年度の採択課題の成果に耳を傾けました。

初日の 9 日は、東京大学医科学研究所の山梨裕司所長の開会の辞の後、先端医療研究開発や、ゲノム・がん・疾患システム領域に関する究果が報告されました。第三世代がん治療用 HSV-1 の効果や安全性（大阪大学）、固形がん適応 CAR/TCR 標的分子の探索と CAR/TCR - T細胞の作出（金沢大学）、子宮体癌スクリーニングにおける液状化細胞診検体の遺伝子解析（札幌医科大学）など、最先端の新たな知見が報告され、活発な質疑応答が繰り返されました。



モデレーター/東京大学医科学研究所 ゲノム医科学分野 柴田龍弘教授

2 日目の 10 日は、千葉大学真菌医学研究センターの米山光俊教授による開会の辞の後、京都大学大学院医学研究科 分子生体統御学講座の竹内理教授による「RNA 分解による免疫応答の制御機構」と題した特別講演が行われました。Regnase-1 調節による免疫制御の試みを多発性硬化症など具体的な病気に適用させることの可能性など最新の共同研究内容が披露され、多くの参加者が耳を傾けました。

続いての千葉大学真菌医学研究センターとの合同成果報告会では、まず千葉大学真菌医学研究センターの共同研究として、microRNA を介したウイルス応答による新しい生体防御機構による人の新しい生体防御機構（東京大学）などが発表されました。その後、医科研の感染症・免疫領域の報告がなされ、小腸自然免疫レセプターの機能解析（産業技術総合研究所）、A 型インフルエンザウイルス感染動態を反映する新規ポリメラーゼ活性測定法の確立（鹿児島大学）など、幅広い観点からの成果報告に議論を重ねました。



モデレーター/東京大学医科学研究所 感染遺伝学分野 三宅健介教授

3日目となる11日は、東日本大震災から10年を迎えたことを踏まえ、参加者全員が2万2000人以上の震災犠牲者に黙とうを捧げてから報告会をスタートさせました。

医科研国際共・共拠点では、国際レベルでの医科学研究水準の向上を目的として海外の研究者とも融合的研究を実施しています。この日は医科研が国際共・共拠点に認定されてから初めてとなる国際共同研究の成果報告が英語を用いて行われ、ニュージーランド・オークランド大学の Monica L Acosta 博士や、台湾・中国医薬大学の Ro-Ting Lin 博士ら多様な研究者が参加し、活発な議論が繰り広げられました。



ミクログリアの可能性について説明するオークランド大学の Monica L Acosta 博士